

私も「死の灰」浴びたのに

グローバル ヒバクシャ 被爆76年

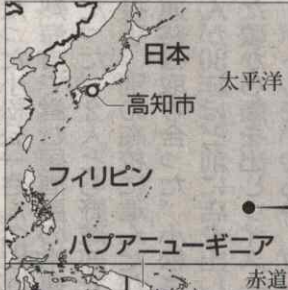
4

ビキニ被曝元船員の声映像化

「取った魚を廃棄させられた。ほんま泣いた」「みんな被曝者を嫌うけん。娘にはだまっちゃった」

スクリーンに高齢の漁師たちが次々と映し出される。高知県に住む彼らが語る。

マーシャル諸島(ビキニ環礁)



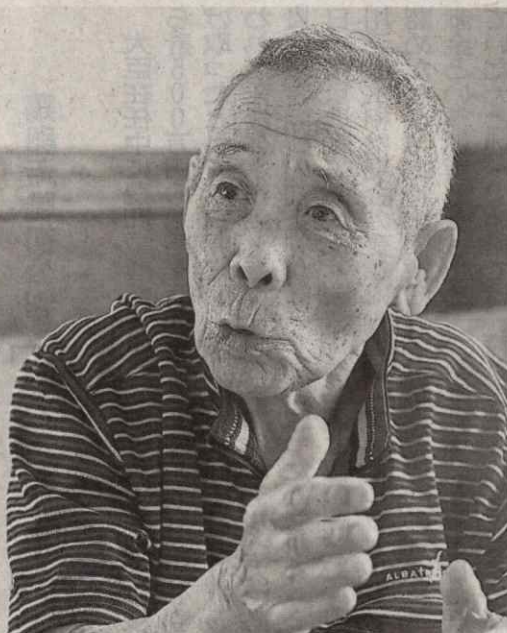
るのは、1954年に太平洋のビキニ環礁周辺でマグロ漁船を操業中、米国の水爆実験で被曝した体験だ。

この記録映像を制作したのは同県四万十町の映画監督、甫木元空さん(29)。6月中旬から7月初めまで、同県須崎市のギャラリィで展示された。

米国は46〜58年、マーシャル諸島で67回の核実験を繰り返した。ビキニ、エニウエトク両環礁での実験は54年に6回あり、周辺海域では高知県のマグロ漁船など日本の船が延べ約1千隻操業していたといわれる。静岡県県のマグロ漁船「第五福竜丸」の被曝は大きく報道

され、米政府が200万ドルの見舞金を支払う「政治決着」がなされた。それ以外は救済対象にならなかった。

「漁船員の高齢化が進み、あと10年経ったら声を聞けなくなってしまう」。県内に埼玉から移住して初めて他の漁船の被害を知った。



インタビューに答える谷脇寿和さん(2021年7月2日午後、高知県土佐清水市、小川智撮影)

「漁船員の高齢化が進み、あと10年経ったら声を聞けなくなってしまう」。県内に



甫木元空さん(2021年7月1日午後、高知県須崎市、小川智撮影)

も含めて2人を取材した。その一人が土佐清水市の谷脇寿和さん(86)だ。1954年3月1日、「第13光栄丸」の上で「死の灰」を浴びた。当時19歳。「甲板で作業中、海に向こうがぴかっと光った。稲妻と思った」と振り返る。

約1カ月後に帰港し、尿や血液の精密検査を受けた。体調に異変はなかったが、30代から立ちくらみがひどくなり、40代で歯が次々と抜けた。80歳を過ぎた2015年には胃がんと肝臓がんを発症した。

同じころ、被曝した漁船員を支援する太平洋核被災支援センター(高知県宿毛市)の集会をのぞいた。ビキニで被曝し、体調不良を訴える元マグロ漁師が集まっていた。「自分一人じゃなかったと涙が出ました」

日本政府は被曝と健康被害の因果関係について、被曝者側に科学的な証明を求めている。竹峰教授は「日本政府も、積極的に補償をするべきだろう」と話す。

(山崎毅朗)